

4. 実証研究の具体的な実施内容及び実施方法等

① 共育コミュニティ（地域学校協働本部）との連携

事業実施校の学校運営協議会委員のうち5名の委員が、橋本市共育コミュニティ本部員・共育コミュニティコーディネーターとして、市の3地域の共育コミュニティに所属している。そのため、高校生の地域貢献活動の機会の拡充に向けた連携が非常に取りやすいという利点がある。実際、5月、7月に行った会議で、高野口地域共育コミュニティと隅田地域共育コミュニティの方から、高校生にボランティア活動の要請があった。

具体的には、高野口地域共育コミュニティからは、高野口小学校での学習支援の要請があり、夏季休業中に高野口小学校サマースクールの一環で実施している「科学教室」「木工体験」に、高校生が赴いてボランティア活動を行った。「科学教室」には高校科学部のメンバーが、「木工体験」には生徒会ボランティアセンターを通じて集まった有志の高校生がそれぞれ参加した。

また、隅田地域共育コミュニティからは、あやの台小学校での学習支援の要請があり、夏季休業中に学習会の運営の手伝い等のボランティア活動を行った。この活動には生徒会ボランティアセンターを通じて集まった有志の高校生と中学生が参加した。

② 地域人材活用

（ア）和歌山大学との連携

学校運営協議会の委員である和歌山大学教育学部教授の働きかけで、橋本高校出身の大学生2名が9月に2回、学習支援ボランティアとして同校を訪問した。2名の大学生は教育学部の2回生で、それぞれ数学と理科を専攻しているため、数学の授業のTT要員や理科の授業の実験の支援等の可能性を視野に入れながら、活動の在り方について協議した。このときは、授業に対する実際の支援活動には至らず、授業の様子を観察してもらうこととなった。

同校と大学との間の移動に時間がかかるため、学習支援ボランティアとして大学生に参加してもらうには、大学での受講時間数が比較的少なくなる3回生が適当である。その実施に向けて今後も継続的に協力を得ることを、大学生との打合せにおいて確認した。

大学生の学習支援ボランティア活動を来年度から本格的に実施させるため、具体的な活動内容や活動規模等について、学校運営協議会を中心として早期に整理していく必要がある。

（イ）橋本市との連携

今年度から、高校1年生の「総合的な探究の時間」では、SDGsの考え方に立ち、橋本市の課題について施策を提言する取組を行った。課題探究については、橋本市政策企画課の職員に1学年生徒全員に対して講義等で市の概要や課題を提示していただき、その後、興味のあるテーマ毎のグループに分かれ、フィールドワークで関係者、関係機関への聞き取り等を行い、施策提言にまとめた。

地域の人材を活用する本取組に対して、学校運営協議会の委員や共育コミュニティ本部員、コーディネーターから肯定的な意見を多くいただいた。